



賢女
全傳

千代物語

八

^ 13
3037
8



門へ 13
3037
巻 8

ちよみんがうろく
千代物語後編巻の三

目録

○ 箕川家再興のころ

○ 八尾平藏のころ

○ 箕川頼貞大高元京佐茶のころ

○ 牛窓のみろくへ赴くころ



東里山人
 長門川
 今川
 ちよよめ
 ちよよめ

ちよよめ物語後編 卷之三
 千代物語後編 卷之三

東都 鼻山人編著

(五) 長川の源系再建の事
 舟八坂平義かろり

水清 されば 臭まきまの ず ぬまきま びー されば 民あやうき
 居まを ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ
 大内家の 徳政 ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ
 幕下 ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ
 長門川 ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ ちよよめ

か徳云あつむりの罪不沈く始終のりやう
明白のやうなれが響が子孫のあらがよれおる
家名を継せよとありける小孫の男の子あらが
従弟の箕川頼母が次男頼貞とありや新
八百石ありて箕川頼貞と稱せりけるが大高
丸京史の慶長公の仁徳厚きを感得頼貞と
も親族のちのちの頼貞の頼貞の今幸十八
ゆく血をなせる壯健なれが丸京史のやう

子百三十一

借も強心との先年徳者の吉次お勉られあ
宿願をなげまひぬとの款榎木雷右門今
武落たる何地つらむを徳せよの吾家
いづどの位か打捨たるある道楽が行末
中一集の小首を刻し強心との冥途の
慰めものせなゆとくが代へたき
昔儂もの款うんぬふお我々千幸万
ゆいぞし丸京史のと史の配偶あせり

ままびくとして道の續ひまど移んぶろふ沙路
これバ西の極北のりよせまづ彼那の國とある
きくして立出るるまふ又榎木雷右門の中國を
去りて筑紫へ流る何ふかの仕官せんとおのへども
一旦逆戻りかえり割へ徳島の所へ行く人
先へ逃ぐるるりさすかふ徳島あらざれば誰抱つる
ののもあく徳島浮世ののれと我らありあたる世の頃
豊那の國大友の領地小土民ども集り一揆成

平右衛門

命ぞ郡司を殺し國主の忠を背くりあや
これバ榎鬼波一揆の中ふをせらるる近江を騒し
賊室を奪ひひとろくあふふ一郡をも押飲せん
エもが重なる罪を責て徳島大友家の代
せられて世のり程よく結まりこれバ一揆不絶せ
ののきびく冷きありる雷右門のまをさむるも
あくせあての會場さあや路を割るの長ふさあ
換又中國へ流る備前のふ牛窓の辺の山麓

一字の庵を結びて住居する人目あり孫務あり
まじも昔のまじりし勢と原憲が遺室あり
の僻さ入もまじり孫晨が一歩の業あり
寒さを防ぎおらず只一笠の食ふ中へ其の日をぞ
あつらふ家あり西の坊に防長のまじり日あり
其れより彼後彼中を經て彼茶の園までいさ
るおらるまじり途の縁ふまじり痛め宿るまじり
なると彼庵室の外面よりまじり雪水の僧

千三拾六回

あしゆぐらひつるりありと村の外に樹あり
夜の宿をの施し一飯の齋戒時をも惠まじり
いふ桂鬼が面をがまあり又知つたれまじり
老教妻一其のく入るまじり怒るまじり
他よりまじりあがら何とまじりふ家ありまじり
痛おつまじり十日あまのけいありの中ふまじり
実ふ一樹の蔭のあり他生の縁とあらまじり
外ふまじり桂鬼在家ふまじり挽鉢とまじり



西心さいしん
 桂鬼けいぎ坊ぼく
 大事だいじをを
 くらくらのの

西心さいしんのの食けをを分わちち又またハハ雷らい右みぎ門かど山やま不ふ登のぼりりてて藪やぶををここええ
 ぬぬ心こころ風かぜがが東ひがし不ふ焚たき付けてて二に椀わんのの茶ちやをを後のちにに供たてげげ
 日ひををああららわわくく破やぶれれししるるふふままるる引ひききつつるる二に人にん強つよささししるる風かぜ
 くらくらががままるるのの傍そばささああぐぐとと涙なみだをを流ながしし今いまハハ飯いひををたたべべ
 ははこころろヤヤさんさん然しかももむむじじりりハハ大だい内ない家け不ふ仕しへへくく女めののあありりしし
 めめののあありりががままるるままるるぶぶららりりののどどくく業ごう荒あららふふららのの想おもひひををててるる
 くらくらははれれおおののれれがが権けん威い不ふままるるせせくく備び置ちふふららののりりのの

あまのさんざん あり ころ あひじ
餘多邊を〜或ひに殺し〜又ハ遊歩するひて焚れ
其の残を移〜あ〜何一ツふ良きまきあひしが一朝ふ
るの破れ勇種とせ〜斬る事とハ如果てゆゆるも
酬の罪とせぬ〜はたの〜人を恨むるもなす〜只後の
世のるゆあれとせらる〜くゆと信〜るれが西心急なま
る付きたあらぬ外あてゆるの儘の中んごあれゆあて
あ〜つるうきあても大内家あての信と名あてゆると
とく あら
同ハ白地さぬあ中も死ら〜くゆとも人あも知らし〜

子ヨ后之六

くらきらいゑん のの あれ きて
桂鬼雷右三門とチ若の懐の果あてゆとりが西心
心の中飛立むらう〜我吉三ハ忠義をらす
の突入を〜念あ〜敵をせぬ〜るゆの嬉し
さまト其の夜の明を結垂と〜朝ま〜死あり 西心訪
チ〜るゑ傍もは程の由情あて星の懐もゆり〜
杖然ゆ〜今日ハ近村ハ枕飾〜て抱ん身のち〜つを
胸すかべ〜と〜き〜れより牛窓の透入形飛舞の
人愛〜て丸糸鞞員が方ハ密〜不虫送〜るる〜

くらき ありう えきう ぶ
桂鬼が在家分明に尋ねあつてのまゝ急ぎに
なつてまづ牛窓まゝ来てうらんとかきまゝ
小庵へ入つて持参の敷物で居るが西んまゝ
はぐぐとおのふ垂ての傘一と敷のあつた
まゆへ二人の女へおまゝにさせまゝと
しがは者今いひで悪んあらうと昨夜の抱残りを
おの懺悔したる人の中おまゝに役なれ御小紋を
今日まづ介抱して親かりし恩もまゝあらうが

十三年の七

おまゝ くらき ありう えきう ぶ
抱きくら白地さぬおぼろつて悪んあらうと昨夜の抱残りを
人におまゝに自害させ二人の女へおまゝに
たらんおまゝに悪んとおのひ付たるも是人情の
あれはうらまゝの傍へつゝあるや近く来て
とらをゆるりあやと居あつたを西んまゝに
くらへは夜店の懺悔したる人の中おまゝに役なれ御小紋を
今おまゝの罪をゆるりあはせの輪廻を離れ
悪んおまゝに悪んとおの桂鬼をゆるりあはせ

今こ入り深くしても 餘らならむもあらう 我が入らぬかむかの 後ごに 経けいふ
 ようしをうまた 死しを 志しすまひに 妻つま川が邊への 家いえに
 入りぬかむかの 父ちちに 妻つまを 教しと 福ふくひ近ちかづくのの事と
 言いふは國くにの 東あづまに 居いるとも 今いまの 妻つまに 命いのちを 授たまはり給たまはれば
 許ゆるさしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば

女

夫つまを 殺ころすべきに 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば
 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば 命いのちを 永ながく 延のびばしめば

是(こゝれ)見(み)ゆる^まは^ままで^まゆ^ふ流(なが)るる^も矢(や)張(は)罪(つみ)障(さや)の^お程(ほど)
 ば(し)是(こゝれ)あ^ひて^まし^ばだ^いふ^く相(あ)果(ぐ)ゆ^りん^{親(おや)}し^まら^せし^ら
 情(なさけ)あ^らせ^れて^あ念(ねん)ゆ^てた^びも^{人(ひと)}今(いま)あ^がは^ひは^{妻(つま)}の^{寧(な)}
 切(き)果(ぐ)し^うと^りし^ば西(にし)の^も實(まこと)と^{感(かん)}し^りぬ^さる^{所(ところ)}
 最(いと)あ^らず^ふ念(ねん)ゆ^まれ^ば桂(けい)鬼(おに)ハ^{刀(やいば)}抜(ぬ)を^あら^うひ^のう^さを
 後(のち)と^{今(いま)}の^{家(いえ)}朝(あ)ど^とる^るあ^らず^しら^うて^おの^ひを^まり
 西(にし)が^ま向(む)お^{切(き)}付(け)る^{コ(こ)}ハ^なを^らし^らし^らし^ら一(ひと)念(ねん)ゆ^まれ^しら^う
 上(かみ)を^{親(おや)}し^もあ^らず^{切(き)}伏(ふ)く^{我(われ)}は^{妻(つま)}あ^らう^るも^{命(いのち)}下(した)の

お^きき^ゆら^まり^おの^れ始(は)り^うう^{馬(うま)}あ^らび^ぎる^{面(おもて)}付(け)ま^の坊(ぼう)
 ま^とこ^{安(やす)}ら^びぬ^おの^ひ一(ひと)念(ねん)ゆ^まれ^しら^うと^まや^さん^げ物(もの)殆(たい)を^め
 せ^いふ^うく^の名(な)あ^まり^おの^れら^うで^おの^れら^うが^あら^ふニ^ッ
 る^おの^{命(いのち)}を^{捨(すて)}る^まに^どや^{汝(なんぢ)}冥(めい)途(と)ふ^ちの^こ昔(むかし)怨(うらみ)逢(あ)い^の程(ほど)
 成(なり)彈(たん)あ^らふ^らし^らし^ら傳(つた)へ^よと^まな^しら^うお^のの^{刀(やいば)}を^はら^うの^{刀(やいば)}を^はら^う
 通(と)して^{二(ふた)}ッ^{三(さん)}ッ^{碎(くだ)}入(い)る^{洞(ほら)}を^あら^うと^{葉(は)}あ^らひ^らり^ぬめ^に
 と^のあ^らく^{流(なが)}る^せし^らし^らし^らち^びだ^んと^らり^ぬあ^らう^くあ^らう^く
 け^のお^の親(おや)あ^らう^まら^う

幸(さいわい)多(た)し^の丸(まる)

菅川執負大高丸系あわらう さききう びせん 佐和のふ
 牛窓のしんま 隣へとも 押のお ちくく 本ほん

活悦防刃きつえつ ぼうじん して大高丸系おほたかまる けい 菅川執負すががわ じつお の西心坊さいしんぼう
 より書状しよじょう 到来とらい して敵たか 桂鬼けいおに がありあり 敵知たかち ずず 様よう の用よう
 夢ゆめ よりより したまふしたまふ ようよう とびとび 名な のの もも 名な 敵たか ずず 様よう の用よう
 意い してして 赤あか 豆まめ ぶぶ 代だい のの ちち むむ 男おとこ のの 姿すがた してして 赤あか 豆まめ
 する刀やいば をを 出だ してして 中ちゆう づらづら のの 妻つま 小こ 女め をを 浅あ まま してして 見み せせ ぬぬ 事こと
 のの 内うち ああ らら じじ づづ らら もも 男おとこ のの 名な ありあり せせ づづ らら ぞぞ ばば ばば のの

菅川執負



此こゝ 借か りり 押お してして 進しん 出しゅ せせ 係けい のの 場ば 女め をを かくかく してして 押お せせ
 せせ 世よ のの 朝あさ りり もも せせ づづ らら ありあり 是こゝ 惟ただ ありあり しましま らら のの ありあり
 一ひと 獲と りり 見み 額がく のの 左ひだり 房ぼう がが 寄よ せせ 刀やいば ありあり せせ めめ てて 是こゝ 是こゝ
 ありあり するする のの 由よし ありあり 中ちゆう 望ぼう をを 見み らら してして 是こゝ 義ぎ がが 家いえ 別べつ のの
 ありあり ぬぬ ぎぎ 一ひと 名な ありあり せせ めめ たりたり といい ひひ くれくれ ばば 丸まる 系けい 交かう 交かう 交かう
 是こゝ をを 赤あか 豆まめ 程ほど ありあり 敵たか のの 首くび 引ひ ぎぎ ぎぎ らら めめ ぞぞ ぐぐ ぬぬ りり
 まま のの らら せんせん 人ひと 安やす くく 押お のの ひひ ぬぬ とと 勇ゆう とと すす んん でで 執じつ 負お とと
 兵へい 友ゆう 人ひと 借か をを 見み せせ ぬぬ 事こと をを 目め 小こ 縁縁 とと 佐さ 和わ のの らら 交かう



とくちやく さうしんぢやく
利悪あゝ西の坊が押えのどく牛窓へいりて
子細を尋ねればさればさよその人なきあるその日
の夜日着の傍を殺しは庵室を捨て何處へ
落しと捨てれば友人の只頼るまは博幸果傳
西人が密計成りしとく是も款の子小懸りしあや
あはれあゝあゝ今を捨てせしあはれあはれ子万是惟
ゆるたぬあまうと足摺して悔とくれども子さうの
綱も切て空しくする沖の船まひぐ傍りもあらざ

とくちやく さうしんぢやく
見が只紡緯と執え合くとちあてもまうくは初はじ
何玉までも追紐と足批ともあはれ西の坊が念
をの勝るうんりのと拳を極り雲を極む的而は
お播列さうてうち載るる勿論お入とも百里家の
杖持ふあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
がらうのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
はる知れ次第何玉あても世後とて中懐をせ
度形ひあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

援例をえしうつらおのむきくらきたる榎鬼えのきが西さへの訪とらひを殺害ころせし
 るの始末しまつの后のち不書ふよ写山あやまの伝つたるあらん訪とらひとらる
 めの寢ひそふ物語ものがたりせしよりよやくくはしく是これ後
 新あらたなるとす



千代物語後編卷三終

千三后

